

もう30年も前の話である。私は玉川村にある玉川村立玉川第一小学校に新採用教員として赴任した。そして小学3年生の担任となった。大学時代の教育実習でも小学3年生の配属となり、6週間過ごした経験があった。自分なりのイメージはもっていた。

だが、私のイメージは打ち砕かれた。子どもたちは、明るく活発で、エネルギーが溢れかたつパワフルであった。最初は、さすがはギャングエイジなどと思っていた。しかし、どうもそれだけではないような気がしてきた。やっぱり自分に指導力がないせいかと考えるようになった。

では、40代の学年主任の学級はというと、私の学級よりは多少ましだが、さほど変わらないように思えた。1学期も終わりに近づき夏休みに入るという頃に、隣の学級の学年主任に言われた。「やっぱり初任の先生のクラスはだめね」のようなことを言われた。その時の私は、肯定も否定も反論もしなかった。軽く受け流すという感じでやりすごした。特段頭にもこなかった。言われたことは事実だった。

その頃の私は、指導力も経験もないので、兎に角、休み時間、昼休み、放課後と子どもたちと遊んだ。毎日ヘトヘトになりながら遊んだ。2校時目と3校時目の間の休み時間には、用務員のおばさんが、お茶やコーヒーを入れてくれていた。他の先生方は、職員室でお茶を飲みながら休息していた。私が職員室に戻ると、私の机にはポツンとコーヒーカップが置いてあるのだった。私は冷めかかったコーヒーを一気に飲み干し、3校時目の授業へと向かうのであった。

子どもたちと遊んでいると、子どもたちの力関係がわかる。誰がガキ大将なのか。学級委員長とは別の実質的なリーダーは誰なのか。いじめられている子はいるのか。休み時間になると、授業とは違った子どもたちの顔を見ることができる。

1学期のある日、校長先生に「高澤先生、ちょっと」と呼ばれた。今までこんなことはなかった。「何かしたか」短時間のうちに、いろいろなことが頭の中を駆け巡った。緊張しながら校長室に入ると、「地域の方から電話がきた」との話だった。その頃、私は学校のすぐそばの教員住宅に住んでいた。普段から村に住む者として、何かと気をつけてはいた。思い当たることはなかった。

すると、「小学校に元気にあいさつしてくれる若い先生がいる」とのことだった。小学3年生は授業で校外に出ることがたびたびあった。私は意識して地域の方に、こちらからあいさつをするようにしていた。畑や田んぼで作業をしている方にも、多少距離があっても、「こんにちは」と大きな声であいさつをするようにしていた。今の私にでもできることの一つに、あいさつがあった。どうやら、感心していい意味での電話だったようである。私があいさつをしていたのは、子どもたちへの教育という意味もあった。私が元気にあいさつをすると、子どもたちも真似して元気よくあいさつをするのである。

結局、遊ぶこととあいさつしかやってこなかった私だが、2学期が終わる頃に、また隣の学年主任に言われた。「2学期は逆転しちゃったようね。私のクラスの方がだめね」2学期の途中の10月頃から、私の学級は落ち着き始めた。一方、隣の学年主任の学級は、一向に落ち着く気配がなかった。さすがの学年主任も悩んでいるのがわかった。

改めて振り返ってみると、あの頃の私は学級担任というよりは、自分がガキ大将だったのである。ガキ大将には、子どもたちはついてくるのである。教育用語を使うと、いわゆる「学級王国」だったのである。